



## 2019年3月期決算説明会概要

5月22日(水)、東京放送ホールディングスの2019年3月期決算の説明会が行われました。概要は以下のとおりです。

出席者：東京放送ホールディングス代表取締役社長	佐々木 卓
代表取締役専務取締役	河合 俊明
常務取締役	菅井 龍夫
取締役	伊佐野英樹

参加者：およそ 50 名

### 〈決算ハイライトほか〉 佐々木社長

#### ▼通期連結決算：好調の放送事業等で増収達成

連結決算について、中核の TBS テレビの放送事業やスタイリングライフ・グループが好調で、連結では増収となった。一方で、地上波のスポーツ単発の放送権料負担や、不動産の修繕費等の増加により営業利益は減益となった。ただし、期首の予想よりは5億円上回っている。投資有価証券の配当金の増加により経常利益は増益。また期末に投資有価証券の一部を売却し、100億円を超える特別利益を計上。そのため、最終利益は252億円と過去最高となった。

#### ▼グループ中期経営計画 2020 進捗状況

##### ①TBS テレビの競争力向上 最強・最良コンテンツを創出

2018年度の通期平均視聴率は、G・P帯で前年を0.1%上回る数字を達成した。G帯が二ケタの数字となったのは2011年度以来、7年ぶり。視聴率2位以上を目指すことも中計に掲げているが、その方策として、世帯視聴率に加え、13歳から59歳の男女の個人視聴率「ファミリー・コア」(以降Fコア)を重視している。番組制作に当たって、Fコアを重視することで、結果的に、世帯視聴率のより一層の向上をはかることができると考えている。Fコアの重視は、スポンサー・ニーズにも合致すると考えている。

##### ②TBS シナジーを生む総合メディア戦略の多様化と挑戦

###### ○ネット配信への取り組みをさらに強化

主にG・P帯で放送したバラエティやドラマを積極的にTVerで配信する。ネット広告収入を取り込むと同時にプロモーション効果により、地上波放送に視聴者を誘引する。また昨年度スタートさせた配信サイト「Paravi」にもオリジナルコンテンツ等を制作・提供し、メディア事業の売上増加につなげている。また、TVerと同様に、プロモーション効果によって視聴者を地上波放送に誘引する。

## ○赤坂エンタテインメント・シティ構想

1月に発表したこの構想は、当社周辺に新たなエンタテインメント施設や文化発信機能を拡充し、赤坂を「世界最高の感動体験を届ける街にする」というもの。今後10年かけて取り組むプロジェクトだ。また昨年11月に、サカス広場に面したビル、「ザ・ヘクサゴン」を取得。将来的には最先端メディアに取り組む戦略拠点を置くことを検討している。

## ○凸版印刷との協業プロジェクト

凸版印刷のVR技術とアーカイブ映像を生かした4K番組を共同制作し、3月にBS-TBSで放送した。また、秋には展覧会の共同開催も予定しており、その他にもイベントや通販、Eコマースでの協業を検討していく。

## ○XRへの成長投資

VRやAR、MR等を総称する「XR」は、当社グループの映像制作力を遺憾なく発揮できる分野だ。教育などの関連領域への拡大も期待できるため、有力な成長投資対象だと考えている。昨年のプレースホルダに続き、このほど、Tyffonへ出資した。XR技術を駆使したコンテンツ開発や体験施設の運営に取り組む企業で、当社の様々な映像制作ノウハウを掛け合わせて、世の中を驚かせるようなエンタテインメントを提供することを目指す。今後もこうしたベンチャー投資を通じて最先端テクノロジーの事業化を推進していく。

## ③TBSグループが果たすべき社会的責任の遂行

### ○ESGへの具体的な取り組み

TBSでは、これまでに様々なESGの取り組みを行っている。TBSラジオ戸田送信所の再エネ化を昨年12月に実現し、あわせて番組でも「クリーン・パワー・キャンペーン」を展開、リスナーとともに環境について考え、行動するという取り組みを行った。事業所内保育所「はなさかす保育園」については、地域の子どもも受け入れ、待機児童解消の一助となればと考えている。また、東京オリンピック・パラリンピックに向けてパラ・アスリートの挑戦や素晴らしさを伝える番組を制作し、『体育会TV』等で放送している。こうしたESGの取り組みは今後も積極的に行っていく。

### ○政策保有株式の縮減

昨年11月に東京証券取引所に提出したコーポレート・ガバナンス報告書の中で、「保有意義が認められない政策保有株式については売却する」と明記。この方針を実行している。実際に、2018年度も複数の株式の売却を行った。

### ○T-work開始

当社はこれまで社員の働く環境の整備として様々な施策を実現してきた。このほど、労働環境に関わる施策をTBSらしい働き方、「T-work」と名付けて一層、推し進めることにした。その一つとして新たにテレワークを導入。育児や介護、病気治療などを抱える社員を対象に、トライアルを実施中。秋には全社で実施し、来年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に合わせ、対象を一般社員にも拡大する予定。T-workの「T」は、TBS、タイムマネジメント、テレワークの頭文字からとったもの。

## ▼グループ会社の再編

「番組制作」と、「映像・文化」はグループ事業の両輪だが、そこに含まれるグループ会社18社を2社に集約した。TBSスパークルは従業員約1200名、TBSグロウディアは約600名と、それぞれ放送業界では有数の規模の会社となっている。

## 〈TBS グループの財務状況など〉 河合専務

通期の業績について、まず連結は売上高 3663 億円、営業利益 185 億円だった。期末に投資有価証券を売却し、100 億円を超える特別利益を計上したため、最終利益は 252 億円と過去最高となった。TBS テレビ単体では、好調なタイム広告や、無料動画配信事業が事業部門の減少をカバーし増収増益となった。TBS テレビの収入の内訳について。放送部門は、タイム収入がスポーツ単発や年末セールス、レギュラーの好調で 15 億円の増収となった一方で、スポット収入は、市況が低迷する中、シェア・アップにより 9000 万円の減収に留めた。無料動画配信事業が伸びたことなどでコンテンツ収入は約 5 億円の増収となった。事業部門は、DVD 事業が移管されたライセンス事業以外は減収となった。昨年度、売り上げに大きく貢献した IHI ステージアROUND東京だが、今年度は企画の入れ替え準備などのため、公演数が大幅に減少した。

主な連結会社の業績について。TBS ラジオは、放送収入の減少や、ナイター終了に伴う番販収入の減少により減収減益。一方で、若者向けの番組強化や radiko を活用した取り組み等で、新しいリスナーを着実に開拓している。BS-TBS は、ショッピング番組は好調だったが、スポット、タイム収入が減少し、減収となった。また、4K 番組や、スポーツ番組の制作費負担が大きく、減益となった。スタイリングライフ・グループは化粧品関係の商材のヒットが続いており、増収増益。営業利益は史上最高を更新した。通販のグランマルシェは地上波番組やネット・ショッピングが好調で増収。一方で、運送費の大幅な値上げ等により営業利益は減益となった。

TBS テレビの 2019 年度の業績予想。通期では、スポーツ単発において 2018 年度よりも規模が小さいことから、タイム収入が微減収、スポット収入は視聴率回復によるシェア・アップで増収となる見込み。事業部門は催事の減少等で、減収。一方で番組原価についても、スポーツ単発の放送権料等が減少するため、テレビ全体では微増収、営業利益は増益の予想。

連結の業績予想は、DVD 販売が好調だったグループ会社の反動等により、2019 年度の全体の売上高は減収となる見込み。また昨年 12 月から始まった BS4K 放送関連の費用が通期で発生することや、グループ再編に関わる費用等のため営業利益以下は減益を予想している。

## 〈視聴率、映像・文化事業など〉 伊佐野取締役

通期視聴率が G・P 帯で前年を 0.1% 上回った。G 帯は 2011 年度以来、7 年ぶりに二桁を達成。NHK を上回ったのは、2006 年度以来 12 年ぶりのこと。G・P 帯の視聴率向上に貢献したのが、まずはドラマ。日曜劇場では『下町ロケット』が話題作の続編とあって終始、堅調な視聴率を記録。『グッドワイフ』は、最終回が 11.5%、総合視聴率 19.0%と、高い数字を獲得した。金曜ドラマの『大恋愛』と、『メゾン・ド・ポリス』も堅調だった。また、若い世代に向けた火曜ドラマ『中学聖日記』、『初めて恋をした日に読む話』が話題となった。また、バラエティ・情報番組では、10 番組が同時帯トップの視聴率を獲得した。また、世帯視聴率ばかりでなく F コア層の個人視聴率で大変に高い数字を獲得する番組もあり、今後もこうした F コア・ターゲットに向けた番組を表案の中で強化していく。こうした中、番組制作費はおよそ 993 億円と、前年と比べて 4 億円の減少。2018 年度は大型スポーツ単発があり、前年に比べて制作原価は増加傾向にあったが、働き方改革も着実に実施した上で、様々なコスト・コントロールで費用削減を行い、通期では減少を達成した。

4月編成のポイントは①Fコア重視②月曜日の改編。2時間サスペンスを終了し、2つのバラエティ番組を投入した。③全日、ノンプライム帯に関してはFコア拡大を意識し、引き続き強化を図っている。

事業部門:映画「七つの会議」は興収21億円を超えるヒット作となった。今年度は、コミック原作のラブ・コメディ「かぐや様は告らせたい」を9月6日に公開する。また興収19億円を超えるヒット作「スマホを落とすだけなのに」の続編が2020年に公開予定。

催事・興行では、IHI ステージアラウンド東京で、8月から「ウエスト・サイド・ストーリー」を上演する。劇場に合わせて新たなステージセットを組み、演出も一新。ブロードウェイで活躍する第一線のキャストによる公演で、ステージアラウンドが、アメリカの演劇界でも認知されてきたといえる。展覧会は、開催中の「クリムト展」が好評。秋には「ハプスブルク展」を開催する。日本・オーストリア友好150周年を冠し、ウィーン美術史美術館に収蔵されたハプスブルク家のコレクションを展示する予定。また、同じく秋に開催する「ミイラ展」は凸版印刷との共同プロジェクトで、世界中から40体のミイラを集めて展示する。

以上